

後にマレー半島を転戦。昭和二十一年復員後は石原産業に就職し、小説「祈りの季節」「偽りの青春」等を発表。昭和二十八年天理大学スペイン語科講師となり、後に教授に。この間、同人誌『人間像』『関西文学』などや新聞・雑誌に多くの作品を発表。昭和四十五年創作集『いのちある日に』を出版し、翌年一月にはスペイン文学の紹介、翻訳に対して、スペイン政府より「イサベル女王勲章」を授与された。

⑧ 瀬田栄之助「娼婦ABC（第一回）」抄（『故郷 FURUSATO 緑風号』アサギ書房、昭和二十三年）

序章

此の街の中央をM川が横断してゐた。M川に架けられたM橋を境界線として、その北部を橋北と云ひ、その南部を橋南と云ひ慣らされてゐた。可笑しな事に、橋北と橋南とはまるで、人種が違ふかのやうに、種々な面に於て昔から交流はなく、各各がその古い殻の中に閉籠つてゐた。此の街を訪れた或る著名な外来者は、仲違ひをした兄弟のやうな水臭さだと評したが、正に当らずと雖も遠からずの感があつた。総ての生活の環境と条件との根本的な相違がその主なる原因であるやうであつた。――

第一次世界大戦後、暫く続いた財界の好景気は此の街の形相に模様の変化を与へた。橋北地帯には数多くの町工場が創立された。そしてその町工場の殆んどは、申し合せたやうに陶器工場であり、その製品は遠く海を渡つて、米国、豪洲に輸出された。やがて、此の街の陶器は、特産物として、小学校の地理書にも記載されるやうになり、それは、又、此の街の景気のパロメーターにもなつてゐた。

橋南地帯は、俗に云ふ下町であつた。下町で六十軒を数へる芸妓置屋、湯屋、料理屋、貸座敷業者を初め、呉服屋、小間物屋、雑貨屋、金物屋、八百屋、勸工場等は陶器景気に左右され、昔の確執を捨てて、一喜一憂した。――

中日事変勃発を機に、海岸は埋立てられて、大小、幾つかの軍需工場が乱立された。街から一里と離れぬ地点に、海軍の厩大な施設を持った石油貯蔵庫、兵営、飛行場が建設され、太平洋戦争突入と共に、街の戦争気分は弥が上にも最高潮に達した。――

当然の事のやうに、軍需景気が到来した。街にはカーキ色の服が氾濫し、人口は六万から一度に十万に飛躍した。呉服屋は店頭から反物を引つ込め、スフ入りの国民服や日の丸の旗を陳列した。金物屋は徴用され、近くの軍需工場に旋盤工見習として入った。勸工場の主人は、在郷軍人の分会長として、朝から街を駆け回つた。八百屋、小間物屋は出征し、店を閉ぢた。動員署長と連絡の

ない街の子女達は挺身隊員として駆り立てられた。そして、遊郭や料理屋は、軍人や御用商人達に占拠せられ、毎夜、酒池肉林の酒宴が開かれてゐた。——外国貿易の閉鎖は、橋北の陶器製造業者に一大痛棒を加へた。不急産業である事と資材難は、陶器工場の窯（かまど）の火を消し、仕事にあぶれた職工の大半は次々と軍需工場に吸収されて行つた。陶器工場から軍需工場に徴用された彼等は、馴れぬ機械油より、土の感触を懐しがったが、戦局は、最早、そんな感傷を許さぬ位、悪化の一途を辿りつつあつた。企業整備で陶器業者は遂に、工場を手放し、曾て落籍させた妓も二度のつとめに出したりした。是迄、大なり小なり、橋北の陶器業者の恩恵を蒙つてゐた橋南の人達は、このやうな変転を殊の外、寂しがった。橋北と橋南の関係は、再び、遮断されたかたちとなつた。橋南の街の人達は、まるで、浮気者のやうに、橋北を見て、新しい国道によつて直結された海岸の工場地帯へ流目をつかつた。舗装された国道には、一日中、軍用トラックやハイヤーが疾走した。戦車も通つた。その轟音は幼児を脅えさせ、その振動は古く朽ちた屋並を傾斜させた。その中に、強制疎開が実施された。街の美しい風景は無惨に破壊され、伝統は紙屑のやうに放棄された。国家総動員法に基く労務調整令と徴兵は、若い者達の悉くを動員した。工場の勤労報国隊や勤労働員学徒から、多くの犠牲者が発生した。東海監理部が公示した此等工場殉職者に対する戦時特別弔慰金の基準は、僅か一千円の格安さであつた。昭和二十年に入ると、此の街にも、B 2 9が飛来するやうになつた。空襲の激化と無理な増産作業は、その危険率を日毎、増大させた。戦争に対する不安な見通しは、徴用工員を初め、街の人達の表情を暗く澱（よどま）せた。精神的に肉体的にみんな疲れ切つてゐた。軍需管理官は悪鬼のやうになつて、工員を督励した。街で進歩的な思想を持つた幾人かが、敗戦主義者として、特高警察や憲兵隊に拘束された。又、戦時中の可笑しい現象の一つとして、警察署に登録される精神病者の数が極端に増加した。戦争恐怖と兵役忌避がその主なる原因であつた。警察署長は苦虫（にがむし）を噛み潰ぶしたやうな顔をして、此の傾向を慨嘆した。——梅雨時に入つて、突如として、此の街は空襲を受けた。まさか、こんな三流都市をと多寡（たか）をくくつてゐた此の街の人達は終始狼狽し、誰もが着のみ着の儘の姿で、焼夷弾の下をM川の川原に避難した。咄嗟の場合の事とて、大概の人達は状況判断を誤り、川原への逃げ道に、広い国道を利用せず、狭い旧街道に殺到した為に、道路は甚しく混乱し、踏み殺された人や焼死した人は数知れなかつた。正に、地獄絵の再現を思はせるやうな無惨さであつた。漸く、川原へ避難した人達も、夜明け方、堤防の上に登り、既に灰燼に帰した懐しい我が街を眺め渡しながら、涙を呑んだ。——

——それから、二ヶ月して敗戦の日が来た。——